

## FIFA ワールドカップブラジル大会レフェリーへのトレーナー活動

妻木充法

東京メディカルスポーツ専門学校  
ジェフユナイテッド市原千葉

### 1. はじめに

2014年サッカーワールドカップは、ブラジルの各地で6月12日より7月13日までの1ヶ月間、32か国の代表チームが熱戦を繰り広げた。大会期間中、ワールドカップレフェリーのトレーナー活動(メディカルサポート)を行ったので、報告する。国際サッカー連盟(FIFA)は、世界最大のスポーツイベントであるワールドカップで、レフェリーを非常に重要な存在と考えている。たとえば、開幕戦の判定がその大会を通じての判定の基準となり、開幕戦と決勝戦の判定は、極めて重要である。また、アシスタントレフェリーの判断で得点を取り消されることがある。そのため、勝敗が換わることもありうる。さらに、ファウルの判定でケガが増えたり減ったりする。それゆえ、優勝したチームの表彰の前にレフェリーチーム5名が表彰台に昇り、メダルを授与される。しかし、選手や監督、観客から納得されるレフェリーイングをすることは、なかなか難しいことである。

そのため、レフェリーチームは、大会10日前から現地で専門的なトレーニングをして大会に備えている。(図1)

### 2. レフェリー、アシスタントレフェリーの特徴

レフェリーおよびアシスタントレフェリーは、90名(25トリオ+アシスタントデュオ)で42カ国(6大陸連盟)から招聘された(表1)。全レフェリーがクオリティの高いレフェリーイングを要求されるため、リオデジャネイロにキャンプ地を設け、大会終了まで、トレーニングを行った。指名されたレフェリーチームは、試合の2日前に現地に移動した。

レフェリー(主審)は、90分で10~14kmを移動し、方向転換を1250回ほど行っている。さらに、ホイッスルとカード以外に多くの装備を身につけている。それらは、ハートレートモニター、ヘッドフォンセット、フラッグビーブセット、バニシングスプレー、ゴールラインテクノロジー(GLT)である。アシスタ



図1 42カ国、90名のレフェリーたち。2014年サッカーワールドカップ

表1 42カ国からきたレフェリーたち

地域	国名	人数
アジア (AFC)	ウズベキスタン、カザフスタン、日本、バーレーン、イラン、オーストラリア	14名
アフリカ (CAF)	コートジボワール、ブルンジ、ガンビア、カメルーン、アルジェリア、モロッコ、セネガル、南アフリカ、ケニア	13名
中北米、カリブ (CONCACAF)	エルサルバドル、USA、カナダ、メキシコ、パナマ、ガテマラ、コスタリカ	13名
南米 (CONMEBOL)	チリ、アルゼンチン、コロンビア、ブラジル、エクアドル、ペルー、パラグアイ	17名
オセアニア (OFC)	ニュージーランド、タヒチ	4名
ヨーロッパ (UEFA)	ドイツ、トルコ、スウェーデン、ポルトガル、セルビア、イタリア、オランダ、スペイン、イギリス、ノルウェー	29名

ントレフェリー(副審)は、移動距離は、6～8km、方向転換950回程度だが、オフサイドなど厳密な判断が求められる。レフェリーは、選手と異なり、交代ができないうえ、平均年齢は、39.0歳と選手より15歳ほど歳が上である。試合を指名されるのは、試合開始48時間前なので、常にベストコンディションを維持しなければならない。それゆえ、メディカルサポートは、極めて重要なのである。

### 3. レフェリーのサポート体制とメディカルチーム

レフェリーへのサポートは、3つのパートに分かれる(図2)。第1は、テクニカルパートでレフェリーイング技術の向上で、7名のテクニカルインストラクターが行った。第2は、フィジカルコンデ

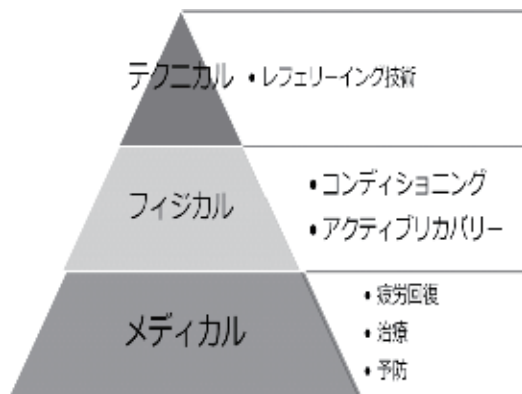


図2 FIFAのサポート体制

ィションで、4名のフィットネスインストラクターがこれに当たった。そして、第3が、メディカルサポートで、8名のトレーナー(フィジオと呼ぶ)が世界5カ国から招聘された。



図3 8名のフィジオ

### 4. トレーナー活動

メディカルチームの目的は、①外傷や障害をなくすこと、②いい健康状態を保つことである。実際の業務は、練習時(ピッチ)とホテル(オフザピッチ)の業務があった。練習は、ジーコフットボールセンターで毎日1回、午前か夕方、2時間程度行った。練習時のトレーナー業務は、①水や氷の準備、②練習やピッチ及び選手のモニターリング、③外傷の応急処置、④リハビリやアスリハ、⑤傷害予防プログラムのサポート等がある。実際は、ロッカールームにミネラルウォーターとコーヒーが用意され、確認することどまった。また、レフェリーは、接触プレーがないため、外傷は、基本的に少ない。むしろ、試合のシミュレーションでゲームをするプレーヤーに外傷(脱臼、骨折、捻挫など)が目立った。リハビリを行うレフェリーは、本大会では、ほとんどいなかった。ホテルでの業務は、①疲労回復のマッサージ、②外傷、障害の治療、③サプリメントや薬品の管理、④毎週1回の体重測定、⑤スケジューリ

ングやコンディションの報告等があった。

マッサージは、マリオ氏と筆者以外の6名のトレーナーが担当した。開幕前に90名全員3回行うように計画した。加えて、希望者は、空いている時間に追加して、実施した。大会期間中は、試合を指名されたレフェリーは、すべて行うことにした。そのため、スケジュールリングが煩雑を極めた。チーフのマリオ氏と筆者の二人は、別の部屋でケガや痛みの治療を行った。鍼治療と物理療法(低周波)が中心の治療だった。サプリメントは、2種あり、クレマグ(クレアチン、マグネシウム)と芍薬甘草湯を用いた。予選リーグが始まると、ピッチに帯同するトレーナーチームとホテルに残って、マッサージなどを行う2つのチームに分かれて行い、1週間ごとに交代した。

### 5. メディカルサポートの成果

本大会期間中の外傷は、下腿肉離れ(Ⅱ度)が1件あった。2010南アフリカ大会では、4件(下腿肉離れ1件、足関節捻挫3件)だったので、本大会は、外傷が少なかった。また、障害の件数は、表2のようであった。外傷、障害ともに鍼治療を行った。

マッサージの件数は、本大会は、1032件と南アフリカ大会の489件に比べて、格段に多かった。6名でマッサージを行

ったので、一人当たりでは、172件となった。鍼治療は、193件で、前大会では、120件と増加した。しかも、マッサージの一人当たりの件数より多かった。そして、レフェリーのみならず、FIFA及びLOCのスタッフも鍼治療を希望して、19名(24件)の治療を行った。鍼治療は、円皮鍼を用いて、Mテストで評価して、刺激する経穴は、バイデジタルリングテストで決定した。安全で、疼痛もなく、効果の高い日本の鍼治療は、極めて好評であった(表3)。

### 6. まとめ

FIFAレフェリー90名のメディカルサポートを8名のトレーナー(フィジオ)で行った。ピッチとホテル内のトレーナー活動があった。マッサージと鍼治療を分担して行い、ケガの減少効果を認めた。日本の鍼治療が好評であった。

表2 障害の件数

	主審	副審	合計
ハムストリング	7	7	14
腰痛(LBP)	3	5	8
大腿四頭筋	3	3	6
大臀筋、中臀筋	3	2	5
下腿三頭筋	3	1	4